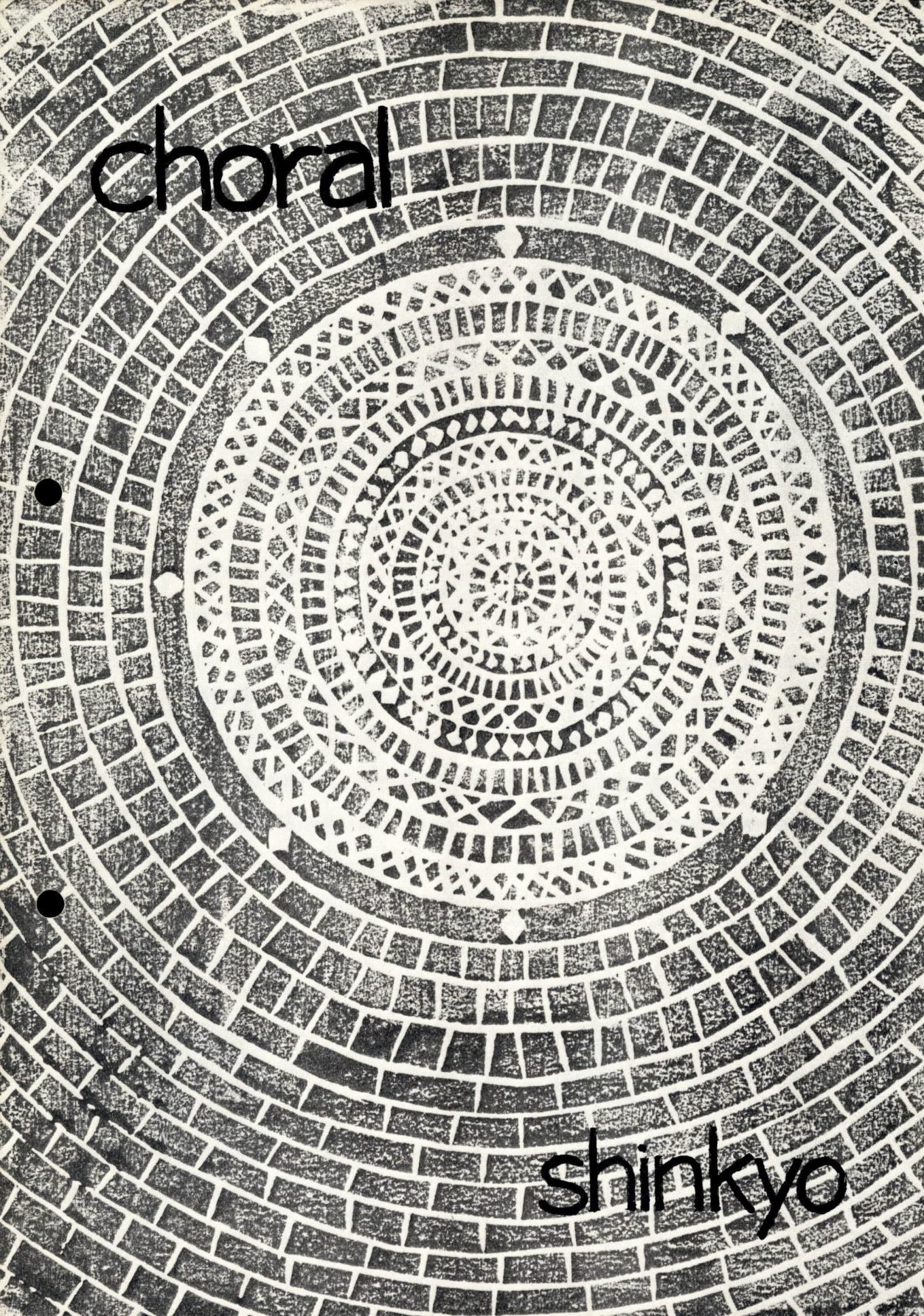




choral

shinkyō

# 新 響 「 第 九 」 特 別 演 奏 会

指 揮 芥 川 也 寸 志  
Conductor YASUSHI AKUTAGAWA

管 弦 楽 新 交 響 楽 団  
Orchestra THE NEW SYMPHONY ORCESTRA

合 唱 合 唱 団 「 鯨 」  
Chorus KUJIRA

ソプラノ 佐 野 順子  
Sprano JUNKO SANO

アルト 菊池 洋子  
Alto YOKO KIKUCHI

テノール 金谷 良三  
Tenor RYOZO KANAYA

バリトン 田島 好一  
Bariton KOICHI TAJIMA

## 曲 目

I 弦楽の為のアダージオ……………サミュエル・バーバー  
Adagio for strings ……………Samuel Barber

II 交響曲 第9番 ニ短調「合唱付き」……………ルードヴィッヒ・V・ベートーベン  
Symphony No. 9 d-minor “Choral” …………… Ludwig van Beethoven

1 アレグロ・マ・ノン・トロッポ——ウン・ポコ・マエストーソ  
Allegro ma non tropp un poco maestoso

2 モルト・ヴィヴァーチェ  
Molto vivace

3 アダージオ・モルト・エ・カンタービル  
Adagio molto e cantabile

4 フィナーレ  
Finale

1970年12月21日(月) 12月23日(水) 7時 共立講堂

——音楽監督・常任指揮者——

## 芥川 也 寸 志

Yasushi Akutagawa

1925年 東京生れ。

1949年 東京音楽学校研究科作曲部を卒業、  
作品は <交響三章> <交響管弦楽のための  
音楽> <弦楽のための三楽章> <交響  
曲第1番> <オスティナート・シンフォニ  
コ> など多数。文豪龍之助の3男、45歳。



### —— 独 唱 者 紹 介 ——

ソプラノ

佐野 順子



武蔵野音楽大学卒業。同専攻科修了。松本紀久子、リア・フォン・ヘッサートに師事。1966年、武蔵野音楽大慈善演奏会のフォーレのレクイエムでデビュー。1970年春、日フィル定期に出演、また秋には東芝レコードのベートーベン全集に録音など、広く活躍している。

アルト

菊池 洋子



東京芸術大学卒業。佐々木成子に師事。1956年、芸大定期のメサイアでデビュー。1966、ウィーン、ザルツブルクに留学、グロスマン、ロイターに師事。1967年10月、イイノホールでリサイタルを開き好評を得た。武蔵野音大講師、二期会会員。

テノール

金谷 良三



1959年、東京芸術大学卒業。藺田誠一、渡辺高之助に師事。芸大在学中から合唱活動に意欲を見せ東京混声合唱団の創立と同時にメンバーとなり、現在では“東混の金谷”として、又、スピントテナーとして合唱界に不動の地位をしめている。

バリトン

田島 好一



1959年、国立音大専攻科修了。1963年、イタリアに留学、ローマ・サンタチェチリア音楽院アカデミアを首席で卒業。1965年、ジュネーブ国際音楽コンクール第3位、ジューリ国際音楽コンクール第1位、等輝やかな成果を収め、声楽界の至宝とされている。

## 曲 目 解 説

### 「弦楽のためのアダージオ」

S. バーバー

1910年、ペンシルバニアに生れたバーバーは、カーティス音楽院で学びました。あちこちの賞を受け、既に親しみある多数の作品で名を知られています。アメリカ人に多いジャズの手法や超現代的なところは見せず、極めて着実で、穏やかな作品を書いております。

この「弦楽のためのアダージオ」は、彼の名を広めた作品でもあります。もともと、27才の時にローマで書いた弦楽四重奏曲のなかの緩徐楽章で、これを七部の弦楽、即ち、第2ヴァイオリンを2部に、チェロを2部に分けた編成で演奏するように編曲したものです。

静かに現れる第1テーマが次第に大きく展開されていき、やがて静かに終わっていく、地味ながら重厚な素晴らしい作品で、演奏時間は7分程です。

### 交響曲第9番「合唱付き」 L.V. ベートーヴェン

ひとまわり昔のワンワンの年の頃には、この交響曲を全部通して聴くのに、私は大変な努力をしなければなりませんでした。頂度、ヴァイオリンを習い始めた頃で、どんな曲でも、ヒコヒコと弦をこすってみたいと気がすまないという時分でしたから、ハイドンやモーツァルトの交響曲をラジオの番組表から見つけ出すや、楽譜屋へとんで行ってスコアを買ってきて、ラジオに合わせて、弾いてみたりしたものでした。スコアというヤツは、全部の楽器の譜がいっしょに書いてあるので、ヴァイオリンのパートを追っていくと、すぐにページをくらなければならず、実際にはほとんど弾いているひまはないのです。けれども、自分ではすっかりいい気持ちになって、おしまいで「ジャン！」といっしょに弾き終ると、もう至極、御満悦のようでした。

そのやまいがとうとうベートーヴェンのシンフォニーにまで及んだ時には、嬉しくてたまらなかったのですが第9番のスコアを買う段になって驚きました。なんと、本の厚さが1センチ9ミリもあるのです。ページにして296ページ。大晦日に（どういう訳か）ラジオにかじりついて聞いたら、1時間10分もかかるのでまたびっくり。……そんな思い出のある「ダイク」ですが、その後何度も聞いたので今はすっかりおなじみです。

ここに、かのベルリオーズが書いた「ベートーヴェン

の交響曲の批判的研究」というのがあります。

……或る日、私は、3, 4人の音楽好きと、パリ音楽院を出てきた。それは、「合唱」交響曲が演奏された日である。

「あの作品をどう思いますか？」と、その中のひとりが私に言った。

「すばらしい。壮大だ。圧倒的だ。」

「それは不思議ですね。私はひどく退屈でした。君は如何でした？」と、そのイタリア人の方へ話しかけた。

「お、私にはよく分りませんでしたよ。というよりむしろ不愉快でした。何しろ旋律がありませんからね。」新聞の批評を次に挙げてみよう。

「ベートーヴェンの合唱交響曲は怪物である。」……

さすがにベルリオーズは、始めから大変にこの曲を気に入ったとみて、更に、

……しかし持ち前の気性からして、芸術の分野を拡張するようなものなら何でも検討しないではいられない音楽家が少しはいる。彼らは「合唱」交響曲の一般的意図を十分に理解した。スコアを読み、何度も注意して聞き、この作品がベートーヴェンの天才の最も壮大な表現であるという確信を固くするのである。……

どうやら、いろんな意味で、大へんな作品であることが少し解ってきたようです。クラシック音楽に、一寸興味を持ちはじめた当時の私ですから、矢張りまだ歯が立たなかったのも無理のないことでしょう。

そしてベルリオーズ氏はまた次のような面白い分析をしています。

……ベートーヴェンはこれまでに既に8つの交響曲を作っている。これを越えようとする時に、声楽と器楽を結合させると考えるに至った。そして合唱とオーケストラとの間にかける橋となったのは器楽による「詠唱」であり、この橋を通して楽器は人声と結びついたのである。

筋道は決った。作者はまさに実行しようとする合併工作をはっきり示さなければならなかった。そこで、合唱長の口を借りて、さっき用いた器楽の詠唱の音譜を使って次の様に言ったのである。

「お、友よ、この調べにあらず！もっと快い悦びに充ちた調べを歌わん。」

ずいぶん長い前おきになってしまいましたが、それではこれから少しばかり曲の説明を書いてみます。

第1楽章はアレグロ・マ・ノントロッポ・ウン・ポコマエストゾ（速く、ただし控え目に、そうしてやや威厳をもって）ニ短調。何ともマカフシギな空虚な弱い響きのなかに、第1ヴァイオリンとヴィオラ、チェロ、コントラバスが奏するアルペジオに始まります。この妙な緊張が次第に高まっていて、はげしく第一テーマが打ちおろされ、いよいよこの一大交響曲に身を吸い寄せられていきます。さか巻くうず潮にまきこまれたようです。これが静まるとおちついた木管の調べによって第2テーマへ導かれますが、ここにもう、あの「喜びの歌」のメロディをチラッと感じさせます。第2テーマは弦楽器の上向音のきざみ伴奏にのって、クラリネット、フルート、オーボエ、ファゴットが、明るき上昇していく旋律を奏でます。そうして下降する第1テーマと上昇する第2テーマがみごとに溶け合っています。

ソナタ形式の第1楽章の終りが近づくのはすぐわかります。低音楽器が半音階でうろつきまわるその上をホルンとトランペットが、そしてそれを追うようにオーボエとクラリネットが悲しい歌を歌いだすと次第に他の楽器もさそわれて音が大きくなっていきます。とうとう最後には大声で全オーケストラが泣き叫びます。

第2楽章、モルト ヴィヴァーチェ（とても速く）は $\frac{3}{4}$ 拍子のスケルツォ。全弦楽器が2回、激しくテーマを示すとティンパニ、続いて全オーケストラが追い撃つようにこれを真似ます。

ティンパニは、それまでは、ドとソ、レとソなどのように4度とか5度とかに音程を合わせるように作曲されるのが普通でしたが、この曲でベートーヴェンは、はじめて、1オクターヴにはなしたファの音に調律するように書きました。この歯切れの良いリズムをティンパニが打つたびに「ティンパニ！ティンパニ！」と聞えるのが面白いです。

8小節の前奏が終ると、第2ヴァイオリン、ヒオラ、チェロ、第1ヴァイオリンの順でフーガ風に現われ軽快に前進します。こうして提示部をくり返し、今度は3小節単位で展開していきます。中間部は木管楽器による二長調の明るいテーマ。続いて弦楽器の音階練習。ヴァイオリンのスタッカートがホルンの奏で一杯気分のふし

を飾り、やがて落ちついたパイプオルガンの音を思わせる経句を過ぎると、曲の始めにもどって再び軽快に躍動します。

第3楽章アンダンテカンタービレ（歩く速さで歌うように）。ひとつの曲というよりも2つの曲が組み合わさっているようです。即ち、変ロ調、 $\frac{3}{4}$ の第1テーマ、ニ調 $\frac{3}{4}$ の第2テーマ。どちらも真に美しい旋律で、ヴァイオリンがこれをまた美しく、装飾、変奏していきます。

ここで再びベルリオーズ氏に登場していただくと、……この不思議なアダージョの奇妙な機構に充分慣れるようになるには、何回も聞く必要がある。これは、広大な作品である。そして、いちどその力強い魅力を感じた時、統一の法則を破ったといて、この作曲家を非難する批評家に対する唯一の答は次のようなものである。

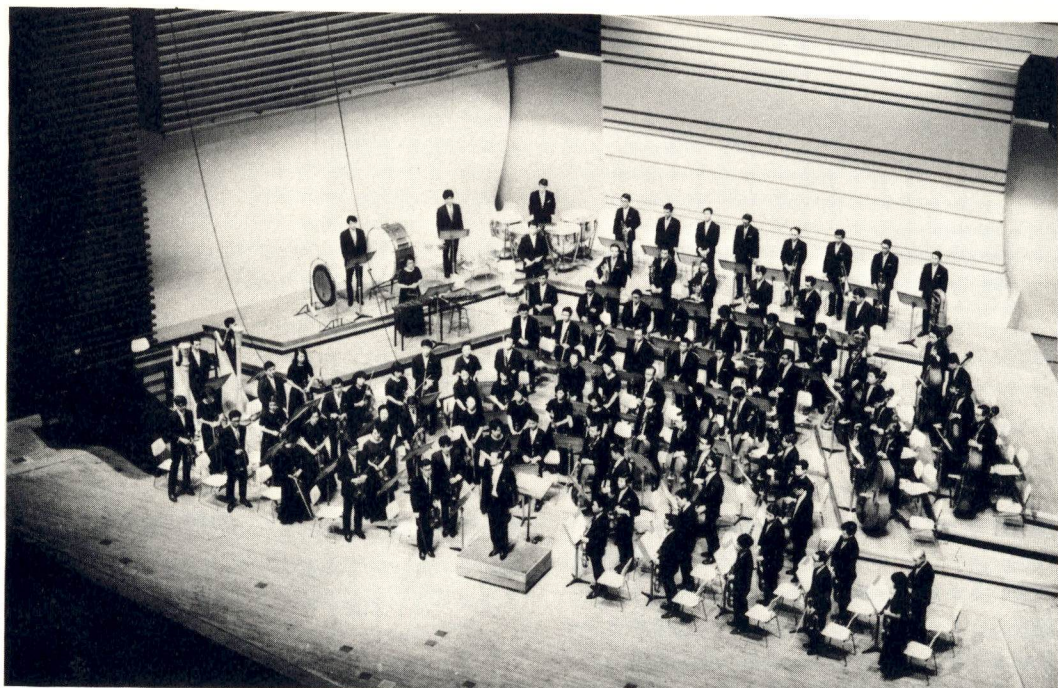
「法則に従えば、もっと悪くなるだろう！」

さて、いよいよ終楽章。

びっくりする不協音にはじまります。これを打ち消すようにチェロとコントラバスが「詠唱」を奏します。やがて第1楽章の断片が現れますがこれも打ち消され、第2楽章のリズミッ的な音楽や、第3楽章の美しい調べも、皆、気に入りません。そうして、静かに「喜びの歌」がチェロとコントラバスによって浮き出され、次第に色彩を添えてヴァイオリンへ、更に管楽器へと移されていきます。再び初めのオーケストラの叫び声があがると、バリトンソロによるレシタティーヴォ。そして、シラーの詩による喜びの歌の合唱となります。

次は、ファゴット、大太鼓によるリズムにのって行進曲。それはやがて喜びの絶叫に変わります。今度は、トロンボーンと低弦の大きな節にはじまるアンダンテマエストゾ、2分の3拍子のコラルで、「もろ人よ、抱擁せん。すべてのものに口づけん…」と歌います。そして、「こんなに速い音符の連続をコントラバスに奏かせることは不可能である。ベートーヴェンのような楽器法の達人がどうしてこの鈍い楽器のためにこのような速いものを書くとは…」という批評をうけた速い6拍子の「喜びの歌」。最後には四重唱とコーラスが交替で、この曲を盛りあげていき、速く、遅く、大きく、小さく、聞く人の心を充分に動かして力強く終わります。

こういう感じ……「キマッたぜ、セニョール！」



## 新 交 響 楽 団

### 最近の主な活動

1955年1月、“労音アンサンブル”として出発し、その年の暮の、芥川氏との出会い、1957年11月、第一回定期演奏会の開催、第二オーケストラ、第三オーケストラ吹奏楽団の誕生、等を経て、1966年、団の運営方法をめぐって東京労音と対立し、芥川氏を擁する団員のほとんどの希望で、労音から独立、新たに新交響協会を設立、新交響楽団、新日本交響楽団、新交響吹奏楽団、の三つの団体による新交響楽協会は独自のユニークな活動を進めて来ました。そして本年10月、日頃私共の考えている理念をさらに、おしすすめるために、東京文化会館を中心に活動している他のアマチュア楽団に呼びかけて東京都アマチュアオーケストラ連盟を発足させました。

新響としては、年間を通じての活動計画、定期演奏会2日制（東京と近県）などで演奏の機会を沢山もち、団員の不足を補いつつ充実した活動をして行きたいと考えています。来年度の演奏曲目もメインプログラムは一応決定し、4月はブラムスの第3交響曲他、8月はR. コルサコフの“シェラザード”他、10月はマーラーの第1交響曲他、12月はベートーベンの第九交響曲となっています。

財政的には月々の団費 400円と演奏会収入のみの孤立無援で非常に苦しいのですが、登録会員も 500名に達し聴衆の皆さまの声援で一諸に音楽の核心に触れる感動が得られるよう努力したいと思っています。

### 1969年

8月4日 サマーコンサート 東京文化会館  
交響組曲「ミシシッピー」＝グロフェ他

10月26日→11月4日 九州沖縄芸術祭参加演奏旅行  
交響曲第8番「未完成」＝シューベルト、バイオリン協奏曲＝チャイコフスキー、交響曲第9番「新世界より」＝ドボルジャック他

12月21日 特別演奏会 厚生年金会館  
合唱団鯨と共演、オラトリオ「救世主」＝ヘンデル

### 1970年

4月13日 第19回定期演奏会 日比谷公会堂  
交響詩「前奏曲」＝リスト、交響曲第101番「時計」＝ハイドン、組曲「展覧会の絵」＝ムソルグスキー＝ラベル編曲

7月1日 合唱団鯨演奏会に出演 渋谷公会堂  
オラトリオ「天地創造」＝ハイドン

8月20日 サマーコンサート 東京文化会館  
軽騎兵序曲＝ズッペ、天国と地獄序曲＝オッフェンバッハ、ウィンザーの陽気な女房たち序曲＝ニコライ、ハンガリア狂詩曲第2番＝リスト、組曲水上の音楽＝ヘンデル、組曲大峡谷＝グロフェ

11月4日 第20回定期演奏会 共立講堂  
序曲「後宮よりの逃走」＝モーツァルト、交響曲第五番＝シューベルト、交響曲第4番＝チャイコフスキー



## 合唱団 “鯨”

新しい合唱運動を標榜し、芥川也寸志氏を常任指揮者として誕生して3年、合唱界にその独自の地位を築きつつある。本年7月のハイドンのオラトリオ「天地創造」の公演で、同じくハイドンの「四季」、ヘンデルの「メサイア」を合わせた、3大オラトリオの上演を完了したが、新訳、新形式という課題と取組み、その意欲的な活動の一端を示した。また年末の「第九」の出演だけでも今回を含めて4回、更にはテレビに一回と、アマチュアの合唱団としては破格の活動を行い、演奏団体としても着実に実績をあげてきた。

音楽におけるアマチュアリズムの追求と社会の隅々までも浸透するような音楽運動を通じて、日本の文化の創造に寄与することを目標とし、その過程で生じてくる様々の矛盾と闘い、逆にこれを前進への糧としていくという信念のもとに活動している。現在団員数180。音楽監督並びに常任指揮者は芥川也寸志氏。

## 今年 の 活 動

- |            |               |             |
|------------|---------------|-------------|
| 4月8日       | ポピュラーコンサート    | 都市センター      |
|            | はるにうたう        |             |
| 7月1日       | 合唱団“鯨”演奏会     | 渋谷公会堂       |
|            | オラトリオ“天地創造”   | ハイドン        |
|            | 管弦楽=新交響楽団     | 指揮=芥川也寸志    |
| 11月25日     | 東京交響楽団定期演奏会出演 | 日比谷公会堂      |
|            | カルミナ・ブラーナ     | オルフ         |
| 12月6日      | TBSテレビ録画      |             |
|            | 交響曲第9番「合唱付」   |             |
|            | 管弦楽=東京交響楽団    | 指揮=芥川也寸志    |
| 12月7日      | 東京交響楽団特別演奏会   | 日比谷公会堂      |
|            | 交響曲第9番「合唱付」   | ベートーベン      |
|            | 合唱=“鯨”、東混     | 指揮=芥川也寸志    |
| 12月16日     | 東京交響楽団特別演奏会   | 日比谷公会堂      |
|            | 交響曲第9番「合唱付」   | ベートーベン      |
|            | 合唱=“鯨”        | 指揮=デビット・カッツ |
| 12月21日、23日 | 新響・特別演奏会出演    | 共立講堂        |

12月6日のTV録画中の事故につきまして、各方面に多大なる御心配をおかけいたしましたことを、お詫び申し上げます。けが人は、その後順調に快復に向っておりますが、寄せられました数々の御見舞に対しまして厚く御礼申し上げます。

合唱団 “鯨”

## 合唱団 “鯨” 団員募集

芥川也寸志が毎週指導する新しいアマチュア・コーラスです。

だれでもお入りになれます。

定期練習=毎週火曜日 P.M.9:00~9:00

場 所=カワイ楽器渋谷・ミュージック・サロン

<次回の練習曲目>

モーツァルト作曲「レクイエム」

〒160 新宿区須賀町14 大湊ビル

## 合唱団 “鯨”

TEL (357) 5255 (但し、平日午後のみ)

## ベートーベン生誕 200年特集

### ぬすみ聞きの記

今年はベートーベンの生誕 200年ということで、内外を問わず、ベートーベンの演奏会が華かだった。新響としては、今回の「第九」が今年の演奏会プロでは誰一のベートーベンであるし、又今年最後の演奏会でもあるので、我が編集部は何か特集を、と考えていた、折も折、新響メンバーが数人でベートーベン論議に燃えている所に居合わせる幸運を得たので、どんなことになるか全く不明ではあるが、こっそりここに再現してみようと思う。

#### ベートーベンはやはり余計な事をしたのか？

**A** 今年はベートーベンの 200年ということなんだけども、わざわざ 200年記念なんて言わなくなつて、毎年ベートーベンはあっちこっちで、いつでも、誰でも演奏するわけで、「ベートーベン」と聞いただけで、「なんだ、又、ベートーベンか」、というように、反射的にベートーベン軽視みたいな風潮があるんじゃないかね。

**B** まあ、確かにそういう面は見られないわけではないけれど、それが直接、ベートーベン軽視とは言えないと思うよ、しかしベートーベンがある種の通俗性を持っている事是否定しないかね。

**C** 通俗性というけども、特にアマチュアの場合、ベートーベンは確かによく演奏会のプロに乗せるわけなんだけど、それはベートーベンが、特に交響曲を考えた場合、オーケストラとしてどうしてもやらなくてはならない登龍門のようなもので、チャイコフスキーの場合なんかは、あれはきらいだ、と言って無視しようとするれば、できない事はないけれど、ベートーベンは音楽のバイブルみたいなものだし、どうしても無視できないものがあるんだよ、そして今のアマチュアオケの技術的レベルにも合っている、ということで、いきおい演奏回数が多くなるんじゃないかな、又、プロの場合、聴衆の動員という事も大切だからね。ベートーベンをやれば心ずれるというような。

**D** それじゃあ、どうしてベートーベンをやると客が多く入るんだろう。

**B** その為にはベートーベンの魅力を解析しなくちゃならないな。一口に言ってベートーベンの魅力って一体何だと思う？。

**C** 本当に高度な音楽的内容を持った良い音楽と、客にうけるということは必ずしも一致するものではないだろう、けどベートーベンの場合、その両方を兼ね備えているという事じゃないかな、というのは、ベートーベンの交響曲というのは、よく中学時代の音楽に興味を持ち初めた頃によく聴く曲だろ、「運命」に感動してクラシック音楽が好きになったなんていう話は多いよね、しかし同じ入門期に聴く「ペールギュント」とかいったものは少したつと余り聴かなくなっちゃうわけだよ、要するにベートーベンは何度聴いても新しい感動があるんだな。

**D** 簡単に言ってしまうと、素人にも玄人にもうける従って聴衆の層が広いという事だね。

**A** それからベートーベンの場合、その作品が非常に時代的に広い範囲にあると言う事、即ちハイドンの焼直しみたいなものあれば、印象派の後期をも予見しているような作品があるように思う、時代に先行していた、と言うか、時代を造ったというか、そんなところが大きな魅力だね。

**B** あるハイドンきちがいが、ベートーベンは余計な事をした、ベートーベンがあんな事をしなければ、要するに「エロイカ」や「運命」なんかを作らなければ、チャイコフスキーだって第五交響曲みたいなやつらしいものは書かなかったらうに、なんて言うのを聞いた事があるけど。

**D** それは逆に取れば、ベートーベンの偉大さを認めている事だね。

**B** 確かにベートーベンは時代に先行していると思う今練習している、「第九」にしたって、ヴァイオリンは、「A」以上の音が当時出せないと思われていたのに、ベートーベンはどうしてもそれが使いたかったんで、しょうがなくて1オクターブその所だけ下げて書いたんだろだから現在ではそれを1オクターブ上げているもんね。

**D** こないだ、カラヤンの「第九」をウィーンのなんか音楽祭の録音というので聴いたんだけど、4楽章の最初の所、オリジナルではトラムペットは木管といっしょに全部8部音符を吹くんでなくて、当時の楽器で出ない音は休止符になってるだろ、それをワインガルトナー以来木管と一緒に全部吹くようになったわけだけど、カ

ラヤンのその演奏はトラムペットがオリジナルの通り吹くんだよ、だから タ——タタタタタタ、というのがタ——タタタターヅタタタターヅタタタ になっているんだ、かえってシンコペーションが強調されてベートーベンらしい感じがしたよ。

### ベートーベンらしきとは？

**C** そのベートーベンらしき、というのも、何をもってベートーベンらしきとするか、は非常に重大な問題だと思うな、例えばさっきのヴァイオリンやトラムペットの例にしたって、あれはワインガルトナーによって偽造されたベートーベンかも知れない、ベートーベンは楽器の能力、あるいは演奏技術を越えたものは本当に符面通りに解釈すれば要求してはいないんだから、楽器の特性を計算に入れてああいいうように書いているのかも知れない、ワグナーなんかの場合にもそんな所があるんだけどそういう場合は他の楽器でうまく補っているんだ。

**A** 去年の定期でやったショスタコーヴィッチの5番でも、2楽章でヴァイオリンとヴィオラがピッチカートで旋律を奏する所にどうしてもトリルが入りたい、しかしピッチカートでトリルはできない、というんでそのトリルだけビッコロで入れるのがあったね。

**B** そうすると、ベートーベンはそういう手法を知らなかったんだろうか、あれ程の人ならその位の事は気が付くんじゃないかな、それでもなお他の楽器で代用する事もしてないとすると、本当にスコアに書かれた音そのものがベートーベンの音楽だという考えは成り立つと思うなあ。

**A** まあそれは、果してどの部分が他の楽器で代用できる部分で、どの部分は代用できないか、という事をもっと細かく調べてからでなくては結論は出せないと思うんだ、そういう記符上の事でなくて他にベートーベンらしき、又はベートーベンの特異性、といったようなものはないだろうか。

**D** ベートーベンの音楽は非常に「自由」だ、と言う事が言えると思う。というのは今迄の音楽の「不自由」に気がついたからそこから自由が生まれたわけだしそれが時代的に見て必然だったのかも知れない、だから人々の心の中に普遍的にあった感情というのを符面にする技術を持っていたベートーベンがたまたま音楽にしたんじゃないのかな、そしてそれができる社会的環境もあったということ。

**B** そうすると、もしベートーベンがいなくても他に

音楽史の上でベートーベンと同じような働きをした人がいた、と言う事かい？

**D** それはわからないけど大きい目で見れば音楽の変遷としては大して変りがないんじゃないか、ということさ。しかしそれはたった一人ではなされなかっただろうね。何人もかかって、何年もかかってなされただろう。それを一人でやってしまった、というのは、ベートーベン以外にはいなかったらうね。

**B** ところで話は変るけど、「作曲」って言うのは、発明なのか発見なのか、どっちだろう。音の組み合わせなんていうのは限りがあると思うんだけどなあ。

**C** そんな事はないよ、周波数は連続的なものだし、文学を考えてごらんよ、たった26のアルファベットであれだけのものができるとし、猿にタイプライターを打たせればいつかはシェークスピアの一節が出てくるだろうし、もっとそれをずっと続ければこれから将来あらわれるであろう名作の一節が出てくるかもしれないよ。

**A** 古代インドには22平均律があったし古代中国には60平均律があったと言うからねえ、それに楽器の音色とか奏法を考えに入れたら天文学的数字なんていうもんじゃないと思うね……………。

**編集子** どうやら話題がベートーベンからはずれて来たようなのでこのへんで、私としてはそろそろそろ姿を消そうと思う。ベートーベンはまちがいがなく偉大であるしその魅力というのも簡単に述べられるようなものでもなさそうだが、ベートーベンの音楽は、音楽を聞き始めた人にはそれなりに、かなり耳の慣れた人には又、それなりに、それぞれちがった味わいがある、クラシック音楽の魅力というのもそのへんにあるのだと思うが、特にベートーベンはその感が強い、シベリウスの後期の作品などは、かなり音楽に付き合ってからでないとその魅力の大部分は気が付かないし、ドビュッシー、ラヴェル、といったもの、又、シェーンベルク、ストラヴィンスキーなど難解な音楽の部類に入るだろう、人によって異論はあろうが、ハイドンなどは極めて明解で何度も聴いていると飽きて来るし、初めて聴いた曲でも、最初の部分をほんのちょっと聴いただけでその後の曲の展開が簡単に予測がついてしまっただけで面白くない、といったものが多い、又、チャイコフスキーなどもちがった意味で単純で飽きやすい、しかしベートーベンの場合は誰が聴いてもすぐわかるし、それだからと言って何度聴いても飽きる、という事がなく、深い謎のような味わいを秘めている。どうやらこの辺がベートーベンの魅力であり、通俗的とまで言われる程聴衆を引きつける原因のようだ。



# プレイヤーの魂まで再生するテープ。 Scotch<sup>®</sup>ダイナレンジ。

演奏の音と再生の音を同じものにする…  
この究極目標に到達したのが、Scotch  
ダイナレンジ。テープの「国際標準規格」と  
なってきたScotchの最高級品。  
ローノイズ・ハイアウトプット  
を可能にしたその音響特性、  
物理特性、磁気特性は、ずば抜  
けています。これを生かせるのは  
プロあるのみ。比類ないS/N比の  
高さ（スタンダードより5dbアップ）。  
超高域から超低域まで録音特性は  
まったく均質。オリジナルの音をあくま  
で忠実に再現します。これこそHiFi。



C-60 ¥500(60分用)  
C-90 ¥800(90分用)  
No.271 ¥650(プラスチックケース入り)

世界の3Mが作る最高級品

## Scotch<sup>®</sup> BRAND 録音テープ

◆ 住友スリーエム株式会社 3M

磁気製品営業部

本社一東京都港区赤坂7-1-21 スリーエムビル  
☎107 TEL 403-1111(大代表)

東京・大阪・名古屋・福岡・広島・仙台・札幌



“Scotch”印及びタータンチェック・デザインは米国3M社の登録商標です。